

New Grove Dictionary of Music and Musicians

—音楽事典の歴史の視点から

New Grove Dictionary of Music and Musicians:
in the context of the History of Music Encyclopedias

安原 雅之
YASUHARA Masayuki

This paper attempts to observe the aspects of musical encyclopedias and dictionaries not only as reference materials, but as historical resources, and focuses on the New Grove dictionary of Music and Musicians in this context. In the course of its history, dictionaries and encyclopedias reflects the developments of musicological endeavor and their cultural and social surroundings. Thus, musical dictionaries and encyclopedias themselves can be used as historical resources to study.

はじめに

New Grove Dictionary of Music and Musicians (以下、New Groveとする)の「音楽事典 Dictionaries and encyclopedia of music」の項目では、音楽事典の歴史は、古くは古バビロニア期にまで遡り、近現代における音楽事典の編纂は18世紀にはじまったとされ、次の5人によって編纂された音楽事典が挙げられている。

- ①ブロッサール Sebastian de Brossard (1655-1730 仏)：フランスの僧侶、理論家、作曲家、辞書編纂者、愛書家である。*Dictionnaire de musique*. (1701) は、「全ての現代的な音楽事典のプロットタイプとなった」と言われる。また、古代から同時代までの音楽について、900人以上が執筆していることが特徴として挙げられる (Duckles 1988:67)。
- ②ワルター Johann G. Walther (1684-1748 独)：ドイツのオルガニスト、作曲家、辞書編集者である。彼が編纂した *Musikalisches Lexicon*. (1732) は、音楽用語と伝記の組み合わせた内容となっており、その後の音楽事典の原型となった。また、バロック時代における音楽の実践についての史料ともなっている (Duckles 1988: 17)。
- ③グラシノー James A. Grassineau (1715-1767 英)：フランス系の家庭に生まれたイギリスの辞書編集者である。彼が編纂した *A Musical Dictionary*. (1740) は、英語で書かれた最初の音楽事典であり、ブロッサールをモデルとしている (Duckles 1988: 386)。

④ルソー Jean-Jacques Rousseau (1712-1778 スイス)：スイスの哲学者、理論家、作曲家である。彼が編纂した *Dictionnaire de musique*. (1768) の内容は、ルソーが他の百科全書ために書き下ろしたものが採用されなかったものに基づいている。「刺激のかつ、18世紀の文人としての高度に個人的な視点が反映されている」(Duckles 1988: 397-398) のが特徴である。

⑤コッホ Heinrich Christoph Koch (1749-1816)：ドイツの理論家、ヴァイオリニストである。彼が編纂した *Musikalisches Lexikon*. (1802) は、ドイツにおける音楽事典の基礎となった。特に、後期バロックや古典派の音楽における形式や技法に関することの情報源として重要である (Duckles 1988: 391)。

フランスのプロッサールの肩書きは、「僧侶、理論家、作曲家、辞書編集者」(Brossard 2001) であり、作曲家としての作品には、バロック時代の様式で、モテット、ミサ、カンタータをはじめ、さまざまな器楽作品などを残している。ドイツのワルターも音楽家であり、「ドイツのオルガニスト、作曲家、辞書編集者」である (Buelow 2001)。彼自身、J. S. バッハに近い親戚でもあり、作曲家としていくつか優れたオルガン作品などを残している。スイスのルソーは、1750年代の“ブフォン論争”においては、イタリアのオペラ・ブッフアの擁護者として、フランス音楽を痛烈に批判している。作曲家としても、オペラ作品などを残している。コッホは、肩書きとしては「ドイツの理論家、ヴァイオリニスト」とされているが、作曲も勉強しており、それは作曲に関する彼の著述に反映されていると思われる。(Baker 2001)

以上、5つの音楽事典の編者のうち、イギリスのグラシノーだけが音楽家ではないことは興味深い。グラシノー以外の4人は、いずれも専門的な音楽家であり、そのことは、彼らによる事典の編集における基礎になっていると考えられる。一方、グラシノーは化学者の見習いの経験があり、また「フランス語に堪能で、ラテン語も理解し、音楽は“少し”知っていた」という (Kassler 2001)。彼は、当時イギリスで活躍したドイツの作曲家ヨハン・クリストフ・ペープシュ (1667-1752) のために外国語で書かれた音楽理論に関する著述などを英訳しているうちに、ペープシュや、イギリスの作曲家モーリス・グリーン (1696-1755)、ドイツの作曲家ヨハン・エルンスト・ガリアード (1666?-1749) などによる勧めにより、音楽事典を編纂することになった。音楽家自身が自身の音楽に関する知見にもとづいてまとめるのではなく、グラシノーのような人物が音楽事典の編纂にあたったことは、本稿が焦点をあてる *New Grove Dictionary of Music and Musicians* (以下、New Grove とする) の創始者ジョージ・グローヴ Sir (1820-1900) へと繋がっていく。

1. ジョージ・グローヴと *Grove Dictionary of Music*

ジョージ・グローヴはイギリスのエンジニア、音楽関係の著述家、教育者であり、また *Grove Dictionary of Music and Musicians* の第1版を編纂した人物である。

彼は、ロンドンの中心部に位置するチャーリング・クロス²で魚や鹿肉などを商う父親とアマチュ

ア音楽愛好家である母のもとで生まれ育った。つまり彼は、貴族階級の出身ではなく、当時台頭してきた中産階級を背景に、音楽文化のみならず、社会や文化に関して多彩かつ国際的な視点を持った人材であったことが特徴である。それは、彼が生きた時代が、産業革命による経済の発展が成熟に達したイギリス帝国の絶頂期とも言える“ヴィクトリア朝”の時代であったことは重要であろう。グローヴ自身、学校では工学を学び、卒業後は機械技師として働いた。音楽は家庭内で学んだほか、ホーリー・トリニティ教会でさまざまな音楽を経験した。1850年には芸術協会書記となり、翌年には万国博覧会のために建設されたクリスタル・パレス³の書記となった。1856年から1896年まで、クリスタル・パレスで開催されたコンサートのための解説を執筆するようになった。1873年9月に、クリスタル・パレスにおける要職を辞し、事典の編纂にたずさわるようになった。典型的な「偉大なるヴィクトリアン」⁴と称されるが、彼の業績には、当時のイギリスが持っていた近代的かつグローバルな視点が、その後大きく発展していく音楽事典の礎を見出すことができる。

ジョージ・グローヴは、1856年からはクリスタル・パレスで開催される演奏会のための解説を執筆するようになっていた。また、その翌年には、イギリスの作曲家アーサー・サリバン Sir Arthur Seymour Sullivan (1842-1900) と共にシューベルトの楽譜調査のためにウィーンに赴いた。さらに、翌1858年には *Macmillan's Magazine* 誌⁵の編集員となり、15年間この雑誌にたずさわることとなった。そして、1873年に音楽事典の編纂プロジェクトが開始された。

Grove Dictionary of Music としてまとめられた事典の第1巻は1878年に出版された。最終的には1880年に第4巻が刊行され、全4巻の事典が完成した。

第1巻の中表紙に「全2巻」と、また第2巻の中表紙には「全3巻」と記されていることから、編集のプロセスにおいて当初の予定より項目数が増加したことによって規模が拡大したことが窺える。New Grove の“Grove”の項目によると、Grove Dictionary of Music の定期購読者のリストには、カンタベリー大主教、ヨーク大主教、英国国教会の司祭などをはじめ、当時のイギリスにおける各界の名手たちが名を連ねていたようである (Graves 2001)。

事典を出版し、ジョージ・グローヴは1883年にはヴィクトリア女王からナイトに叙せられた。また、社会的な立場としては、ロンドンに王立音楽大学が創設され、初代校長に就任するなど、イギリスにおける音楽界において中心的な役割を果たすようになっていった。

ジョージ・グローヴは1900年に亡くなるが、その後も、Grove Dictionary of Music の刊行は続いていく。第2版の編集はジョン・アレクサンダー・フラー・メイトランド⁶に移管され、全5巻で1904年から1910年にかけて刊行されている。第3版と第4版ではヘンリー・コープ・コレスが編集者となり、第4版では1巻増えて全6巻となった。続く第5版は第2次世界大戦後に刊行されたもので、全9巻となった。

スタンレー・サディーによれば、彼が次期編集長に就任したのは1969年であり⁷、それから約10年をかけて New Grove Dictionary of Music and Musicians の編纂が開始された。

さまざまな版の歴史とまとめると、次のようになる。

第1版 Sir George Grove, ed. 4 volumes 1878-1880

第2版 J. A. Fuller Maitland, ed. 5 volumes, 1904-10

第3版 H. C. Colles⁸, ed. 5 volumes 1927-28.

第4版 H. C. Colles, ed. (第3版の修正, 6 volume) 1940

第5版 Eric Blom⁹, ed 1954 9 volumes

New Grove Dictionary of Music and Musicians. Stanley Sadie, ed. 20 volumes, 1980.¹⁰

New Grove Dictionary of Music and Musicians. 2nd edition. 29 volumes, 2001.

また、1980年にNew Groveが刊行されてから、内容を限定した新しい事典が作られている。それらには、下記のものが含まれる。

New Grove Dictionary of Musical Instruments (3 volumes, 1984),
2nd edition* (3 volumes 2002).

New Grove Dictionary of American Music (4 volumes, 1986),
2nd edition* (8 volumes, 2013)

New Grove Dictionary of Jazz (2 volumes, 1988), 2nd edition* (2002)

New Grove Dictionary of Opera (4 volumes, 1992)

New Grove Dictionary of Women Composers (1 volume, 1994)

オンライン版は1980年版が出版されたあとに開始されているが、インターネットの発達に伴い、New Groveでもオンライン化が進んでいる。2001年の2nd editionをベースに、上記の事典の*マークがついたものは、オンライン版に含まれている。

2. New Groveにおける「チャイコフスキー」の項目について

長い年月の間に事典が改訂される場合、当然のことながら、研究が進んでさまざまな新事実が明らかになったり、あるいは音楽を取り巻く環境が変化して、それにともなって事典の記載内容が変更されるケースもある。

New Groveにおける1980年版と2001年の2nd editionの大きな変化のひとつに、ソヴィエト連邦の崩壊が挙げられる。New Groveでは、国名や、またある程度の規模の都市については、都市名も項目になっている。当然のことながら、旧ソ連の一部であった15の共和国は、2001年版ではそれぞれ独立した国として項目が立ち上げられている。旧ソ連関係の内容については、単に各部分を切り離して掲載するわけではなく、多くの項目は新たに書き下ろす必要があった。

チャイコフスキーの項目の場合、ソ連崩壊は直接的な影響はないが、1980年以降のチャイコフスキー研究の進展を反映して、項目の内容には大きな違いが発生することとなった。

①Dictionary of Music 第4版(1940年)

筆者が所属する愛知県立芸術大学の図書館には第4版が所蔵されており、そこに含まれる“Tchaikovsky”の項目を参照する。

Grove Dictionary of Music 第1版が刊行された1880年現在、まだチャイコフスキーは存命であったが、第4版の項目には作曲家の死についての記述もあり、少なくとも1893年以降に項目の内容が改定されたことは明らかである。¹¹

作曲家の死にまつわるいくつかのセンセーショナルな見解が広く流布しており、いまでも一部では信用されている。しかし、医療面からの意見からも、また彼の最後の数日に実際に接した人たちの貴重な見聞などを鑑みるに、これまで聞いていた話が本当のこととして受け入れられるのではないかと考えられる。

この文章では、直接的な言葉は避けて述べられているが、ここで言うところの「センセーショナルな見解」は、作曲者の自殺説のことであり、また、「これまで聞いていた話」は、作曲者はコレラで亡くなったということであると思われる。

アメリカへ亡命したソ連の音楽学者アレクサンドラ・オルロヴァが自殺説を発表し、事態は一変する。この音楽学者は、モスクワ郊外にあるチャイコフスキー博物館に勤務し、そこに秘蔵されているチャイコフスキー関係の非公開文書にもアクセスできる人物であったことから、信憑性も高く、さらに彼女の説が1980年に刊行された権威ある『ニューグローヴ音楽事典』に採用されたことで、自殺説はセンセーショナルに、事実として、またたく間に世界に知られることとなった。翌81年にイギリスの音楽雑誌に発表された彼女の論文によれば、「チャイコフスキーの死因を巡る疑惑は彼の死の当初からあり、音楽仲間や当時のペテルブルグの人々の間では、疑いなく自殺説が信じられていた」のであり、彼女はまず、チャイコフスキーのホモセクシュアリティは当時の人々によく知られていたこと、作曲家自身にとってそのことが精神的重荷になっていたことを5通の手紙の引用によって説明する。そして、コレラ説については、(1) 知識階級にあったチャイコフスキーの環境においてコレラに感染することは考えられない、(2) チャイコフスキーの遺体がコレラ患者のものとして処理されていない、という2つの点から否定する。

そしてここからが本題となる。オルロヴァは、悲愴交響曲の初演から発病する11月2日までのチャイコフスキーの足取りを、さまざまな資料から詳細に追うのだが、そうすると、10月31日の日中の行動だけが全くどこにも記載されていないことが判る。そしてオルロヴァは、この間隙を埋めるべき決定的な情報を得るのである。その情報とは、チャイコフスキーと同じ法律学校の卒業生から聞いたという話である。その話によれば、ある貴族が、チャイコフスキーがその人の甥と関係を持ったことに立腹し、そのことを告発しようとしたが、チャイコフスキーの身と母校の名誉を案じたジャコビ氏なる人物が緊急会議を招集し、最終的に作曲家が自ら命を絶つべきであると決定し、チャイコフスキーはそれに従って服毒自殺した、というものである。また、法廷弁護士ゲルケが、契約のために11月1日

にチャイコフスキーを訪れていることが資料から判明されるが、チャイコフスキーの弟モデストによる作曲家最後の数日間の行動記録から省かれていることを指摘し、ゲルケが毒物を持参した可能性を説いている・・・オルロヴァの自殺説は興味深い話ではあるが、核心となる部分については、仮説と又聞きの話によるもので、確かな証拠はない。

②New Grove (1980年)版

1980年に出版されたNew Groveに含まれる「チャイコフスキー」の項目は、イギリスの音楽学者デヴィッド・ブラウンDavid Brown (1929-2014)によって書かれている。ブラウンはチャイコフスキーの自殺説を新しいNew Groveの項目で採用したが、それはセンセーションを巻き起こしたと言っても過言ではないだろう。

ブラウンは全4巻のモノグラフ *Tchaikovsky: a Biographical and Critical Study* (London, 1978-92) を著しており、文字通りチャイコフスキー研究の第一人者である。New Groveが刊行された1980年には、それらのうちの第2巻まで出版されていた。

New Groveに掲載さらえたチャイコフスキーの伝記の部分で、彼の死に関わる部分は次のように記載されている。

その[交響曲第6番]初演から9日後の11月6日にチャイコフスキーは死去する。それが自殺であったことには、疑問の余地がない。しかし、何がそうさせたかについては、最終的には分かっていない。ソ連の学者アレクサンドラ・オルローヴァは、1966年にレニングラードのロシア博物館のアレクサンドル・ヴォイトーフという老人から聞き取った話を'78年に明らかにしている。それによると、ロシア貴族の一人が、甥と密通したとして作曲家を訴える手紙を書き、高級官吏のニコライ・ヤコービに託してそれを皇帝に渡すよう頼んだ。チャイコフスキーと同じく、かつて法律学校の生徒であったヤコービは、このことが公になって「学校の制服」が汚される不名誉を恐れ、スキャンダルを防ぐ方策を検討するために、名誉法廷（これにはチャイコフスキーの同級生6人も含まれた）を急遽組織した。チャイコフスキーは10月31日にこの法廷に召喚され、5時間以上の審議の末に、作曲家は自殺すべきという判決が下された。2日後に作曲家は危篤に陥るが、砒素系の毒によることはほぼ間違いない。生水を飲んでコレラで亡くなったという話は捏造である。(Brown 1980)¹²

上記の引用は、1980年に出版されたNew Groveが日本語に翻訳されて、1993年に刊行された日本語版『ニューグロヴ世界音楽大事典』の第10巻に掲載された訳である。1993年当時、自殺説を否定する学説もすでに発表されており、日本語版では、チャイコフスキーの項目の末尾に「追補」として、その後の展開の概略が説明されている。

さて、「自殺説」が8年後の1988年に、アメリカ在住のロシア人学者（文化史）であるアレクサンドル・ボズナンスキーが発表した論文は、綿密な資料考証に基づいて、オルロヴァに反論していくもの

である¹³。ポイントだけをまとめると、まず、19世紀ロシアの上流階級におけるホモセクシュアルの習慣について、皇帝の弟でもあったセルゲイ大公を頂点に流布しており、セルゲイ大公やその他の皇族とも親しかったチャイコフスキーにとって、彼のホモセクシュアリティにまつわるトラブルが、オルロヴァが指摘するような自殺を促すようなものになるはずがないとする。オルロヴァがコレラ説を否定した第1の点については、オルロヴァが示した数字の誤りを指摘し、当時コレラに感染する可能性が貧困層に限らなかったとする。また、2つ目の点（遺体の処理法）については、オルロヴァが提示した規定は1892年付のものだったが、ポズナンスキーは1893年3月に開催された医師会の決議に言及し、チャイコフスキーはこの新しい規定に則って処理されていると指摘している。さらに、チャイコフスキーは発病から4日後に亡くなっているが、毒物学の観点から、それほどゆっくり効く毒物が使われた可能性はほとんどないとする。

2001年版の「チャイコフスキー」の項目は、ローランド・ジョン・ワイリーによって書かれており、作曲家の死因については、かつて流布した2つの話は極端であり、作曲家がなぜ死んだかについては究極的にはわからないと結論づけている。

おわりに

New Groveは、言うまでもなく、英語で書かれた音楽事典としては最も規模が大きく、幅広く世界に普及しているレファレンスである。イギリス帝国のヴィクトリア朝における文化的かつ社会的繁栄を背景に生まれた音楽事典は、特に1980年に刊行されたNew Grove以降、国際的な一大プロジェクトとして今日もかたちを変えながら展開している。音楽事典の、レファレンスとしての機能を鑑みれば、最新の情報に基づく正確性が最も重要であるが、歴史的にみれば、それぞれの版が、それぞれの時代における研究成果を反映していることを鑑みれば、音楽事典そのものが音楽の史料となる。New Groveの編集者であるサディーは次のように述べている。

グローヴ音楽事典第6版 [1980年版] は、第7版 [2nd edition] が出版されたら跡形もなく消えるわけではない。より古い版は歴史的な史料であり、今後の世代の人々が過去を理解するために、また古いことがらについて調べる際に使えるように、閲覧可能な状態にしておくべきである¹⁴。

規模の大きな事典の場合、書架のスペースの問題から複数の版を閲覧可能にすることは難しい場合もあるのが現実である。しかし、それらの史料としての価値も鑑みれば、それらを保管することは当然のこととして、閲覧可能な状態にしておくことは極めて重要である。また、教育に際しては、事典のようなレファレンスにおいても、そこに記載されていることが恒久的な真実と限らない場合もあることを指摘しておくべきであろう。今後さらにオンライン化が進むことを鑑みれば、“情報”に対するリテラシーがより重要なことになっていくだろう。

主要参考文献

- Brown, David. 1980. "Tchaikovsky, Piotr I'i'ich." *New Grove Dictionary of Music and Musicians*.
- Duckles, Vincent H. and Michael A. Keller. 1988. *Music Reference and research Materirence: An Annotated Bibliography*. 4th edition. New York: Schirmer Books.
- Newmarch, Rosa. 1940. "Tchaikovskym, Peter Ilich" *Grove Dictionary of Music*, 4th edition.
- Poznansky, Alexander. 1988. "Tchaikovsky's Suicide: Myth abd Reality." *19th-Cwntury Music*. Vo. 11, No. 3: pp. 199-220.
- Sadie, Stanley. 2000. "The New Grove, Second Edition." *Notes*. Vol, 57, No. 1, pp. 11-20.

Grove Music Onlineの項目

(<https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/> Accessed 5 Nov. 2023.)

- Baker, Nancy Kovaleff. 2001 "Koch, Heinrich Christoph." *Grove Music Online*.
- Blom, Eric, and Malcolm Turner. 2001. "Colles, H(enary) [Harry] C(ope)." *Grove Music Online*.
- Brossard, Yolande de. 2001 "Brossard, Sébastien de." *Grove Music Online*.
- Buelow, George J. 2001 "Walther, Johann Gottfried." *Grove Music Online*.
- Graves, C.L., and Percy M. Young. 2001 "Grove, Sir George." *Grove Music Online*.
- Kintzler, Catherine. 2001 "Rousseau, Jean-Jacques." *Grove Music Online*.
- Kassler, Jamie C. 2001 "Grassineau, James." *Grove Music Online*.
- Scholes, Percy A. 2001. "Hawkins, Sir John (i)." *Grove Music Online*.
- Westrup, Jack, and Rosemary Williamson. 2001. "Blom, Eric." *Grove Music Online*.

註

- ¹ 本稿は、筆者が2005年度から2020年度までの間に愛知県立芸術大学音楽学部において断続的に担当した講義「音楽学概説」(全15回)のうちの1回分(90分)の授業内容をもとにまとめたものである。この回の授業のタイトルは「音楽事典の歴史」で、授業後の課題として、受講生各自が、興味のあることがらについてNew Groveで調べるレポートを課した。
- ² ロンドン中心部の、トラファルガー広場の南に位置する地区。
- ³ 水晶宮とも呼ばれる。1850年にロンドンのハイド・パークで開催された第1回万国博覧会のために建てられたもの。鉄骨とガラスでできた巨大な建物。
- ⁴ Graves 2001
- ⁵ 1859年に創刊された月刊の文芸雑誌(1907年に廃刊)。記事の執筆者が記載された最初の雑誌とも言われている。
- ⁶ J. A. Fuller Maitland (1856-1936):イギリスの音楽評論家。
- ⁷ Sadie 2000:14.
- ⁸ Henry Cope Colles (187901943).イギリスの音楽批評家、音楽関係の著述家。
- ⁹ Eric Blom (1888-1959):イギリスの音楽批評家、著述家、編集者。
- ¹⁰ Grove Music Online のウェブサイトで Grove による第1版からカウントして、1980年に出版されたNew Groveを第6版6th edition、2001年に出版されたものを第7版としているが、2001年版は実際に英語で Second editionと記載されていることもあり、本稿においては2001年版はNew Groveの2nd editionとして取り上げる。
- ¹¹ 第2版および第3版においてどのように記載されていたかについては、調査を必要としている。
- ¹² この訳は、日本語版『ニューグローヴ世界音楽大事典』の該当箇所の引用である。
- ¹³ Poznansky 1988
- ¹⁴ Sadie 2000:15-16.

執筆者

安原 雅之(音楽学部作曲専攻音楽学コース 教授)